

## 「県民と県議会との意見交換会」 北上会場 の概要

〔日 時〕 令和元年12月13日（金）13：00～15：00  
〔場 所〕 北上地区合同庁舎 大会議室  
〔テーマ〕 女性の視点を生かした産業振興及び女性活躍支援について  
〔参加者〕 （9名）

小野寺 敬 子  
高 橋 玲 子  
桶 田 陽 子  
菅 原 由 美  
松 田 希 実  
熊 谷 由美子  
千 葉 真 弓  
南 洞 法 玲  
飯 森 千 加

〔出席議員〕 （9名）  
佐藤ケイ子議員、岩城元議員、臼澤勉議員、高橋穩至議員、武田哲議員、佐々木朋和議員、  
佐々木努議員、小西和子議員、工藤勝子議員  
〔オブザーバー議員〕 高橋はじめ議員  
〔事務局職員〕（9名）

### ◆ 参加者自己紹介及び現在の現在の活動状況等の紹介

#### ○小野寺さん

住まいは一関市川崎町で、会社まで車で40分ほどの場所である。今は2世帯住宅で主人、主人の両親、今年の3月から息子たちと同居し、程よい距離感を保ちながら生活をしている。息子が保育園に入ったことをきっかけに今の会社で働き始め、それ以来、二十数年間お世話になっている。

三光化成株式会社は、青森県弘前市から広島県まで国内に事業所が11ヶ所ある。海外は中国に2ヶ所、メキシコに1ヶ所あり、日本と海外を合わせて1,300人規模の会社である。私が所属している一関第2工場は100人ぐらいの工場、プラスチック工業部品の製造をしている。他の工場やグループ会社では家電、OA機器などを作っているが、一関第2工場では100%車の部品を製造している。トヨタ自動車東日本株式会社の金ヶ崎町にある岩手工場と宮城県大衡村にある大衡工場に製品を納入している。昼夜関係なくお客様の生産ラインに合わせた生産体制をとっている。従業員は100人いるが、そのうち女性は派遣の方も含めて18人いる。女性従業員で昼夜交代勤務をしている方は9人おり、子供がいる方、お年寄りが家にいる方などいろいろな家庭環境の方がいるが、御協力のもとに交代勤務を了解していただいている。

トヨタには必ずカイゼン活動がついて回る。一関第2工場では、からくりのカイゼンということで、作業者が部品を取り出す時に1センチでも近く、0.5秒でも早く、そのサイクルを短くしてものづくりをすることで、1時間の作業時間の中での出来高をいかに上げていくかというカイゼンを行っている。カイゼンを行うためには、いろいろなメンバーが集まって、いろいろなアイデアを出す必要があるが、メンバー間のコミュニケーションが取れていないと自分の意見を出さないこともあるので、多くのメンバーに意見を出してもらうためにコミュニケーションシートというものを利用している。なかなか思っても言えない方からは、コミュニケーションシートにアイデアを書いてもらい、意見を出してもらうということをやっている。これは六、七年前から行っているが、

その結果、不良製品の流出割合もどんどん減ってきており、現場でのモチベーションも高まってきていると思う。

年に1回、名古屋市と横浜市で開催されるからくり改善工夫展には2014年から毎年出しており、好評をいただいている。お金をかけずに行うカイゼンの内容をそういった場で毎年発表させていただいて、2年ぐらい前には特許も取得している。そういうものをもらおうとモチベーションが上がる。その特許を取ったカイゼンを岩手県のからくり改善の発表会に出したところ、県知事賞をいただき、これもモチベーションのアップに繋がっていると思う。

今日は異業種の方も多数おられるので、いろいろな意見を聞いて、女性の活躍をますます広げていければと思っている。

## ○高橋さん

株式会社デンソー岩手に勤務しており、改善を推進する部署で小野寺さんからお話しのあったモノづくりのからくりカイゼンなども行っている。出身は奥州市である。通勤路ではいつも佐々木努議員が街頭演説をしている。

家族構成は社会人になった子供が2人おり、現在は息子と雄猫1匹と暮らしている。

仕事については、QCサークル活動という五、六人でグループを作り、会社の中のいろいろな問題や課題を解決していく活動と個人の提案活動を加えた2本を柱としたDIQC活動という呼称の活動を展開する推進事務局を担当し、社内の活動活性化のためのいろいろな教育、イベント等を開催している。QCサークル活動は全国を束ねる本部が東京にあり、今年度は下部組織である青森岩手地区の副幹事長をしている。地域の活動を活性化させる手伝いをさせていただけたらということでのいろいろなイベントの開催や、企業を回って一緒に活動する賛助会社の誘致活動等をしている。その賛助会員になっていただいている企業に関しては、QCストーリーという改善のステップや、統計的手法も一部含まれているQC手法を勉強したいというところに出向き、一緒に勉強をしている。

また、学校側から企業ですぐに戦力になるような人材を育成したいという希望もあり、3年前から県立黒沢尻工業高校の専攻科でQCストーリーやQC手法と一緒に勉強させてもらっている。

それから、11月に青森岩手地区に在籍する企業が、自分たちの会社で行ったいろいろな改善事例を発表する発表会を開催した。そこで、県にも協力いただき、一番の評価をとったところに岩手県知事賞を設けていただいているが、今年は弊社がいただいた。

今日は、多くの議員が出席しているのでお話をさせていただく。QC検定という日本規格協会が主催している品質管理全般の試験があり、試験会場は全国にあるが、岩手県を含め全国で五つの県だけが開催地に入っていない。QC検定を受験する会社が増えており、注目されている検定であることから岩手県でQC検定が開催できるようにお力を貸していただきたい。

## ○桶田さん

現在は遠野市宮守町にある地域の180軒ほどの農家が集まり、一つの集落で一つの農業経営をしようという農業法人で副組合長として勤務している。出身は盛岡市で、高校まで盛岡市にいた。その後、農業関係の仕事をしたと考え北海道帯広市の大学に進み、しばらく北海道で農業関係の仕事をしていた。その後、地元岩手に戻って農業をしたいという気持ちがあったが、その前に青年海外協力隊というJICAボランティアに参加し、インドネシアに2年間程行っていた。そういった経験も得ながら、地元岩手に帰ってきた。1人で農業をすることはなかなか難しいと思っていたときに、ちょうど今の組合に出会い、1人で農業経営をするよりも、地域全体で農業を営み地域を守っていくということに引かれ、就職という形で遠野市宮守町に移住した。

12年ほど前に就職し、当時はトマトの栽培に取り組み始めた時期で、私はトマト栽培の担当をしていた。その後、平成22年から農産物加工の事業を行っていくことになり、それ以降は農産物加工

事業の責任者として働いている。農産物加工については、全くの素人だったので、研修などで技術を身につけ、今はどぶろくを作ったり、地元の農産物である米やトマト、ブルーベリー等からジュースにしたりして、農産物を加工、販売する事業を行っている。地元宮守の農産物を加工、販売する他に、岩手県内の農家の方々に生産物、特にリンゴやブドウといったものを加工所に持ってきていただいて、ジュース等に加工してお返しする農産物加工作業も委託事業として行っており、平成22年から創業して12年になった。現在、パートを含め社員16人で仕事をしており、そのうち13人が女性である。ほとんどが地域の農家のお母さん方である。地元の農産物の加工、商品開発に関して、地元のお母さんの知恵や、日ごろ食品を手にする機会は女性の方が多いと思うが、そういった女性の方の知恵をお借りしながら進めてきている。

あと、働きに来てもらっているメンバーの中には若い方もおり、子育ての真っ最中という職員もいる。今までは農業法人として男性しか働いていなかったのですが、そういった女性の方も働いてもらうために、職場の待遇改善などにも努めている。職員が結婚して子供が生まれたから育休制度を作るなど、職員の方がそういう立場になったときに、その都度待遇なども改善しながら事業を続けている。女性がメインの職場であり、そういったことが地元の事業、仕事につながっていくということを通して、農村の振興に女性が寄与していくということに参画していきたいと考えている。

### ○菅原さん

私は4人の男の子を育てている。平成23年3月11日東日本大震災があった時は、お腹に3番目の子供がいた。その後、3月23日に出産して、そこから二、三カ月以内に仕事を決めないといけない状況で、小さい子供を抱えながら就職活動を行って、現在の勤め先である有限会社かさい農産にお世話になっている。嫁ぎ先は義母が1人で農業を行っていて、農業の大変さはわかっており、知人から農業法人を勧められたが、前職で会社に勤めていた時に、子供が入退院を繰り返して、また子供が入院をしなくてはならないと会社に伝えたところ、それはいいけど仕事どうするのかと言われた経験があり、休みが無いような農業法人に勤められるのか迷っていたところ、今の会社の会長にそれでもいいから来てみなさいと言われて勤め始めたのが、農業の世界に入ったきっかけである。

当社には、小さい子供を抱えながら働いているお母さん方もいて、子供が寝ている早い時間に来て収穫の仕事だけ行い1度自宅に帰ったり、授乳のために帰ったりしながら働いているお母さんもいる。私たち小さい子供を持ったお母さんたちが、家のことも子供のことも粗末にしないで、限られた時間だが仕事に力を注げるのはそういう整備をさせていただいたおかげである。去年、農山漁村女性活躍表彰の女性活躍法人部門で農林水産大臣賞を受賞させていただいたが、それでも男性がこうとか女性がこうというやり方をしてきたわけではなく、男性には勝てないところも女性には多々あるので、お互いの思いやりなどを大事にしながらフォローしあって仕事してきたところが良いところだと思う。

当社はハウス71棟、露地355アールぐらいあり、大規模な事業を行っている会社である。その中で下は18歳、上が80歳を越えた方まで働いている。皆さん楽しいと言って朝の仕事を終わった後にお茶を飲みに行くといったように、みんなが信頼し合って働けていることは良いと思う。会長もだが会社全体が私たちが理解してくれ、意見を聞き入れてくれる体制がある。経営の役に立っているかはわからないが、そういったところが、私たちも力になれるということを感じながら仕事をできていると思っている。

農業としては農福連携ということで障害を持った人達とも一緒に同じ作業をしているが、障害を持っていてもそれを感じさせず、すぐくまじめに働いてもらっている。

### ○松田さん

出身は宮城県仙台市である。結婚を機に遠野市に移り住み、夫と夫の両親と子供3人の3世代で暮らしている。嫁いだ先が一日市通りというところで150年ほど続いているお菓子屋を営んでおり、

普段は主に明がらすの製造販売をしているお店を手伝っている。また、4人で立ち上げたもくもく絵本研究所という合同会社に兼業で携わっており、遠野の間伐材を使った木の絵本を作る仕事をしている。グッドデザイン賞をいただくなど、割と注目されていて、東京などでも取引していただいている。あとは、遠野市のわらすっこ支援委員会の委員長を務めている。今日は、商店街で取り組んでいる活動を御紹介する。

私の住んでいる商店街は一日市といって、1のつく日に市がたったことからその名前がついた。かつては沿岸と内陸を結ぶ交易の拠点として栄えた時代があり、馬千匹、人千人の賑わいであったと言われるほど栄えた時代もあった。これは全国的な商店街の問題だが、人々のライフスタイルの変化、店主の高齢化、後継ぎもいないといった問題が一日市商店街にもものしかかかっていて、今はちょっと寂しい感じの商店街になっている。商店街でかつて呉服店だった建物を拠点として、5年ほど前からひといちゴブリンプロジェクトという商店街の活性化活動を地元の中高生と一緒に取り組んでいる。商店街の課題解決は難しいと思うが、もっと違う視点で何かできないかと思ったときにこういう活動を考えた。

まず、活動の内容だが、どこの中学校等でも総合学習でふるさと学習に一生懸命取り組んでいる。ふるさと学習では、子供たちが地域に出て、地域の人と協力して学ぶという授業があるが、それとマッチングさせてもらい、商店街の活性化のために、どんなことができるかを一緒に考えながら活動を行っている。その初年度に、キャラクターグッズを作りたいという子供たちがいた。ちょうどいろいろな方とマッチングしていただいている中で、ゴブリンという、いろいろなものに宿る妖精を造形している小中大地さんという方と知り合ったことがきっかけで、その方に御指導いただいてキャラクターを作ることになった。

まず、フィールドワークで各店舗の歴史、店主の思いを聞き取った上で、その店を守ってくれているようなキャラクターをつくり出してみようという提案をして、1年目はそれを作り、商店街の皆さんに贈呈してお披露目する活動をした。2年目は、その子供たちが商店街全体のキャラクターを作りたいということだったので、もう1度キャラクターを作り、それを子供達が各お店から商品を仕入れて売る町市という活動を開催した。その次の年は、県立遠野緑峰高校というホップから作る和紙で成果を上げている学校があるが、その生徒たちがホップ和紙を使ったランプシェード作りを展開したいということで、また、ひといちゴブリンとコラボレーションさせて欲しいということで、地域の皆さんと一緒にランプシェードを一から組み立てていくという活動をした。

どうしてそういった活動をしようかと思ったかということ、日頃遠野市で子育てしている中で、遠野市は文化も自然も本当に豊かで、ザふるさと、という感じであり、私にとってはそういうふるさとというものを持てる人はうらやましいという気持ちがどこかにあったことがきっかけである。ないものもたくさんあるが、いいなと思って暮らしてきたが、地元の人にはあまりそれに気づいていない。何もないからとか、こんなところによく来たと言う。大人が何もないと言ってしまうので子供たちも何もないと思って過ごしていく。遠野市には高校以上の学校がないので、高校を卒業するとほとんどの子供が遠野市を離れていくが、その中で何もないということが実は豊かであるということ私たちが大人がちゃんと伝えなくてはいけないのではということをして子育てをしている中で感じている。皆さんもちょっと想像して欲しいが、自分が住んでいる商店街の問題と重ね合わせたときに、その商店街の人たちは高齢で自分が70代後半で、後継ぎもいないお店を1人で切り盛りしていて、行政から活気を出せと言われてもなかなかできない。新しいことをはじめる、やる気はあるけど力がないといったときに、すでに持っているものを見つけたらいいのではないかと思ひ、ではこの商店街がすでに持っているものって何だろうって考えたときに、例えば長年大切にしてきた生業への思い、使い込んできた道具、お店を切り盛りしてきた人といった宝物がたくさんあると思った。そういったことが文化資源ではないかと思ひ、商店街にたくさん人が来るといふ目標ではなく、商店街というステージを地域の子供たちの夢を育めるような場所にすることができないのではないかと思ひ、そういう活動を始めた。

物を売るという役割だけではなく、経験しながら学べる場としての商店街の役割という方向に少しずつシフトチェンジすると、1人でお店をやっている方も、中学生や高校生が町に来て話を聞いてくれる、自分の思いを伝えることができる。もしかしたら継承していける、そういうことを子供たちが学んで、一度遠野を出たとしても、何かを身につけ、帰ってこられるような場所をつくれたらいいという思いで活動している。

女性活躍には関係なかったが、私もこの活動を自分が楽しいからやっていて、誰にやれと言われてたわけでもなく、女性、男性というとらえ方を越えて、外からの評価に左右されず自分たちがやりたいことを楽しくやっている。なかなか横につながれる仲間がないのが悩みで、いろいろな方にマッチングしていただくが、一緒にやるのは難しく、そういった仲間を男性でも女性でもいいから、自分たちがやりたいと思えることを地域の中で実現していけるようになるといいと思う。

## ○熊谷さん

私は一関市生まれ一関市育ちで、嫁ぎ先は一関市の農家で、現在も一ノ関駅から北上駅まで普通列車で通勤している。一ノ関駅から自宅はちょっと離れており車で20分くらいの場所である。子供が3人おり、上の子は大学3年生、真ん中の子は今年大学受験、下の子は高校1年生である。ちょっと緊張感のある冬を越さなければいけないという思いである。皆さんの話と少し違うかもしれないが当社の状況についてお話をさせていただく。

当社は、まず就業人口の減少、在宅勤務、出張の減少等があり、環境の変化そして働き方の変化によってビジネス需要は大変厳しい状況となっている。そして当社だけではなく地域の皆様に共通する課題となると思うが、人口減少による地域衰退も共通の課題として捉えている。当社としてこれらに対して、交流人口を拡大して需要を拡大していこうという取り組みをしている。具体的には、一つは観光キャンペーンを実施して、外からお客様を呼び込むことに取り組んでいる。最近では、いわて幸せ大作戦と題して、4月から6月まで岩手にお客様を呼び込むという取り組みをした。今後は、震災から10年を迎える節目の年の2021年に東北6県で協力して、東北デスティネーションキャンペーンを行う計画である。また、列車に乗ること自体が目的の乗って楽しい列車といったものもいろいろやっており、皆さん御存じだと思うが、県内だと花巻駅から釜石駅間を運転しているSL銀河、また大船渡線の一ノ関駅から気仙沼駅間を運転しているポケモンウィズユートレインを運行してお客様を呼び込むということをしている。JR東日本では、そういった列車を大体18列車運行している。

もう一つ、駅社員によるアイデアで、旅の目的づくりをしてお客様を呼び込むとか、駅を魅力あるものにしていこうということで、北上駅では、日ごろ北上線を御利用いただいている西和賀高校と専大北上高校の生徒に北上駅の0番線に北上線の四季の移ろい、春夏秋冬の絵を書いていただき、北上線の魅力を伝えようという取り組みをしている。

北上駅は現在39人の社員がおり、その内女性は11人いる。私も平成3年に入社してからずっと仕事を続けているが、その間にいろいろな経験をしており、社員一人一人に規則や規定、制度のすべてがそのまま当てはまらないことがある。社員数が多いからできるのかもしれないが、それを超えて対応できるものについてはそれぞれに合わせて対応している。個人的には子供が育つ段階の中で根っこを形成するすごく重要な時期があると思う。立場的に言っただけいけないかもしれないが、この時期は仕事と家庭を同じくらいの比重にしても、この時期は家庭に比重を置いたほうがいいといった話をする。

個人的な話に戻るが、先ほど申したとおり一ノ関駅から20分ぐらいのところに住んでおり、子供3人を育てる中で、何が一番大変だったかということ、送り迎えが一番大変だった。片道15kmを一日に5往復して100km以上走ったりした。土日には路線バスが通っていなかったりなど、過疎化が進むということは、子供を育てる環境として街中で暮らすより厳しいと個人的には感じている。今日はいろいろ勉強させていただきたいと思う。

## ○千葉さん

現在は北上市文化交流センターさくらホールで、指定管理者の一般財団法人北上市文化創造の企画事業課で仕事をしている。

東京都八王子市の出身で、大学でアートマネジメントという公共ホールの運営を学び、そういった現場に関わりたいたと考えていたところに北上市さくらホールで募集があり、採用していただいた。1人で移住したIターンである。北上市で生活しているうちに、鬼剣舞が大好きになり、結局16年間北上市に住んでいる。

農業が盛んな地域に住んでいるので、周りはおじいさんとおばあさんしかいないような地域になっている。そこで義理の祖母、義理の父、自分たち夫婦、娘1人の4世代で暮らしている。すべての文化が新しく、民俗芸能にも関わっており、雪かきの効率的なやり方もわからなかったが、一つ一つ楽しんで、今は生活を豊かに過ごしている。

仕事の話で、最近の公共のホールは、今までの伝統文化や鑑賞事業だけをやり続けることから役割が変化し、社会構成といった役割や教育福祉との連携、観光、産業との連携という役割となり、16年間の社会の変化を感じている。

公共のホールにしかできないことがあるはずということを常に認識して、テレビ局の事業部やプロモーターとは一線を画すような、地域の方を元気にするような事業をいつも考えている。指定管理者となっているので、スパンは短いけど5年の経営計画で運営をしてきた。

しかしながら、さくらホールが北上市の文化行政の一部分を担うという明確なものがないことから、今文化振興条例を制定しようとする動きがある。この動きは北上市が県内に先駆けて行っており、北上市民の間で勉強会が始まっている。NPO法人芸術工房が立ち上がり、月2回集まって勉強会が進んでおり、どういう文化振興条例を作ったらいいのか検討している。こういった動きから、北上市に住む皆さん、そして、交流していただく周辺の地域の皆さんにとって、さくらホールがどのような役割を果たしていけるかを考えながら運営をしていけたらと思っている。

県の動きも重要で、県の方でも、私たちの動きを引っ張っていただけるように話をしている。

条例を作った時には、計画がもう一つできる。それをどう評価して、次のサイクルにまわしていくかが非常に重要なので、できれば審議会と市民勉強会と一緒に意見交換しながら、一体的に岩手県が良くなるように文化の面でも活性化していければと思っている。

文化芸術には、他者との共感や創造力を活性化する力がある。そういった力があれば、男女間の齟齬みたいなものはなくなっていくと思うので、こちらの方面からも地域を作っていくようにしていきたい。

一般財団法人北上市文化創造には、プロパー職員が14人いて、半分が女性職員のため、遠慮することなく協議できる組織になっている。

## ○南洞さん

毛越寺には僧侶が15人ほどいるが女性は私1人である。お寺の世界は、完全に男性優位である。その中で、女性は1人であるが、毛越寺の方たちは本当に良くしてくれて、苦に感じたこともなく、伸び伸びといろいろなことをさせていただいている。

毛越寺は大きなお寺でいろいろな部署があり、私は総務部で次長を務めている。普段の仕事内容は、法事や御祈祷もあるが、観光誘致や広報担当をしている。毎年、北海道や東京、大阪などに観光誘致に行き営業活動をしている。

東日本大震災から10年ということで東北デスティネーションキャンペーンがあるが、平泉も世界遺産登録10周年となるので、イベントの企画や営業活動もやっていくことになる。

広報活動としては、テレビやラジオなどいろいろと対応している。毛越寺と言えば、御存じでいてくださるが、中尊寺同様、敷居の高いお寺というイメージがあり、そこを何とか払拭したいという思いがある。中尊寺の和尚と2人で、わくわく法話という法話をしており、皆さんとより近いと

ころでお話するというをやっている。

大阪や東京方面に行くと、跡地というと石碑が一つ立っているところが多いが、平泉は、よく残ってきたと思う。国宝第1号である金色堂や毛越寺の浄土庭園は、いろいろな戦や戦争があった中でも残ってきた。やはり、地元の方たちが一生懸命残してきてくださった遺跡だと感じている。それを次の世代に残していきたいという思いもあり、平泉が私の目標としては、次の100年に続くような活動をしていきたい。

私自身は寺を継いだ、イメージ的には大きな親会社が毛越寺で、その下に小さいお寺が18軒あり、その中の壽徳院というお寺を継いだ。いい御縁にも恵まれ、現在は旦那もおり、一般の会社で働いている。

次の100年に続ける活動としては、毛越寺も中尊寺も地域と関わりのある行事が大変多いが、地元の方たちでも、平泉が大好きなのにどういった活動に参加していいのかわからない人たちや、いろいろやりたい、やりたくてうずうずしているが、どうすればいいかわからないという人たちがたくさんいる。そういった方たちと一緒に行動しようということで、平泉ほっとする食のプロジェクトに参加している。地産地消ではないが、地元でとれる食品を使いつつ、さらに平泉文化に合ったものを作っている。

もう一つ、毛越寺と中尊寺はお寺なのでろうそくを使う。短くなったらろうそくを再利用し、色を付けてカラーキャンドルにして、思いを込めて次の方にお渡しするという世界遺産キャンドルプロジェクトがある。地元の小学校、中学校、町の行事で作って、次の方たちの手に渡る取り組みをしている。

最近始めたのが、平泉のかをり創造プロジェクトで、薫物というお線香のような丸く練った練香というものの平安時代のレシピが残っており、平泉ではどういった香りが焚かれていたのかを想像しながら、お香の再現と、地元でとれる植物をお香の材料として使ってオリジナルのお香を作りつつ、世界遺産登録10周年に合わせて販売できればいいと思っている。さらに平泉の文化や伝統と一緒に発信したい。

子供たちには、私たちが平泉で楽しそうに活動している姿を見てもらいたい。それが子供の心の中には残るはず。いずれ平泉に戻ってきて欲しいという思いはあるが、それぞれがどの場所にいても平泉のことを発信できるようになって欲しい。そういう活動を今後も続けて行っていきたい。

## ○飯森さん

普段はカフェの店主をしている。祖父母、父母と妹の大家族で暮らしている。

いわて県南アートプロジェクトは、名前のおおりの岩手県の県南で活動しており、メンバーは奥州市、平泉町、一関市の20代から40代の若者で、立ち上げから4年目となる。岩手県からも補助金をもらい、まつりフェスというイベント、簡単に言えば県南地域の六魂祭のようなお祭りを2回行った。これまでに奥州市江刺地区と平泉町で行っていて、3度目の今年度は、3月に一関市千厩地域で開催する予定である。

若者の活動は、最初は人数がたくさんいて、勢いもあるが、結婚や会社の異動などにより、急に人数が少なくなったタイミングがあった。補助金をいただいても、人がいなくては活動できないという課題がある。自分たちで考えていきたいが、これから活動できるように、何かいい案があれば拝借したい。一番は仲間が増えることを期待し、活動を工夫していければと思っている。

メンバーには表現者が多く、音楽や能、アナウンサーもいる。これからは自分たちの各分野それぞれが、プラスになるような活動ができればと思っている。

◆ 意見交換

○小西和子議員

県や自治体に求めるもの、こういうことをやってもらいたいということをお聞きする。

〔回答：小野寺さん〕

次の女性のリーダーを育成したいが、40代から下の方々が、結婚すると子育てに従事してしまうので厳しい。もっと子供を預かってくれる施設があればいい。預かってくれる時間も、もう少しカバーしてもらえれば、女性も企業に残って働けるのではないかと感じている。

〔回答：高橋さん〕

岩手県民は、やる前から私には無理と思う方が結構多い。女性で活躍されている方の情報を、ぜひ広めていただきたい。このような意見交換ができる場ももっとあればいいと思う。

〔回答：桶田さん〕

6次産業化は加工品や商品を首都圏に売ろうという動きになりがちであるが、地元で作った農産物を地元で消費していく動きにならないかと思う。地元の給食センターや病院など、地元の農産物を食べてほしい人たちが取れていないという状況にある。食べてほしい人たちに地元農産物を届けられるしくみづくりを考えていただければ大変うれしい。

〔回答：菅原さん〕

若い母親の意見とすれば、仕事が選べないというのは大きい。仕事をしないと私たちは暮らせない。女性活躍という言葉は、夜まで働きたいなどではなく、限られている時間の中で自分たちが何ができるかだと思う。私たちでもできるような仕組みづくりができれば、やらされ感も感じることもなく、楽しくできると思う。

人口減少に関しても、空き家はふえているが、そういう情報が外に発信されていない。地域ぐるみで、移住してきた人を育てることなどができれば、まち、地域、お年寄りの方の活性化にもつながると思う。若い人からお年寄りまで暮らしやすいようなまちづくりができたらと思う。

〔回答：松田さん〕

女性活躍支援という言葉が、県民にも広がっていくと思うが、個人的には活躍という言葉を聞くと、成功しなくてはいけないという感じがする。そのように思う人もいるのではないか。

女性活躍という言葉の持つ意味は広く、大きいものだと思うが、本来的な部分をもっと周知していないと、女性活躍という言葉だけが取り残される。ただでさえ、女性は育児や家事、介護などマルチタスクを担いがちであり、特に東北はそのような傾向が強い気がする。社会的に決められた役割から逃れることは難しいにしても、県で女性活躍という言葉の広い意味を定義してもらいたい。

〔回答：熊谷さん〕

女性が一番迷うこと、困ることは、子供を出産して育てていく中で、住んでいる場所によって地域格差があること。

子育てしている世代の方が情報を共有できる場があればいいと思う。

〔回答：千葉さん〕

マルチタスクという話があったように、過労死寸前で働いているお母さん方が多い。例えば子供がインフルエンザにかかってしまえば、夜中まで看病してそのまま会社に行くことが多い。

家事を自分のこととする男性の割合は増えてきたとは思いますが、手伝っている感覚の人が多く思う。自分がするという感覚を持ってもらうのは次の世代と思う。女性も男性も高等教育を等しく受けてもらって、社会で活躍してもらい、活躍することで、洗練されてくる考え方があると思うので、ぜひ教育支援の方にも、厚く配慮していただきたい。高い知識を持った人が社会で活躍すると、社会が変わるとすごく感じる。

〔回答：南洞さん〕

育児に積極的な男性僧侶もいる。保育園の迎えなどを男性僧侶が行っている方もいるが、そういっ



たところは夫婦間であったり、社会的なところであったり、お互いの認識が合わないところがあるのではないかと思います。

待機児童の問題は大きいと思う。働きたくても働けない、働くためにおじいちゃん、おばあちゃんに子供を任せるにしても、高齢により大変だと思うので、少しずつ改善していただければありがたい。

**【回答：飯森さん】**

大学を卒業して何年か東京など関東地方にいて、たまに帰省するお客様と話しをしていると、交通手段が足りないという話を聞くことが多い。交通機関が少ないし、バスもない。職場までの足がない。それが理由で、宮城県や関東地方にそのままいるという話をよく耳にする。公共交通機関の話になるとシルバー世代のことでしか話題に上がらないが、意外と若い人たちも車がなくてもいいところにいる人が多いので、若者もこの点に関しては必要としている。

**○佐々木朋和議員**

女性男性問わず、男性も家庭と仕事を両立しながらやっていくことが、女性の皆さんを助けることに繋がると思うし、まさにジェンダーレスでやっていかなければいけないと感じた。

中小企業も、働く皆さんに来ていただくためには、きめ細やかな子育て支援、介護支援のための時間を融通するといったところで社員を助けることによって、働きに来ていただける環境を作らなければいけないと思うが、どのような取り組みが必要か教えていただきたい。

私も青年会議所とか商工会議所の青年部で地域づくり活動をしていると、会議の時間が長くなったりして、女性がなかなか入りづらい雰囲気があると思う。そのために会議時間の短縮や女性委員長の場合にはその人に合わせて会議を行うなどの取り組みもしたこともある。そこで会議を開催したり、まちづくり活動をする上で、どういった工夫をされているのか伺いたい。また、どういった改革をしていけば女性ももっとまちづくりに参加できるのか、考えをお聞きする。

**【回答：飯森さん】**

私たちのグループはほとんどの人が独身である。どうしても結婚すると会議などに来られなくなる。私たちは、奥州地域など活動の場を限定しているが、そこを改善していかなければならない。

**【回答：南洞さん】**

地域柄と言うか、皆さんでの会合みたいな機会が大変多く、会合の後には飲み会が付きもので、そういったところで参加しづらいとか、家に帰って食事も作らなければならない状況だと、それを家のものをお願いすることになるが、それにいたたまれなさもある。そういったところは改善していかなければならないと思う。

実際、先ほど何種類かのプロジェクトのお話をさせていただいたが、メンバーはほぼ女性であり、子育てされている方もいるので、集まるのは昼間である。お子さんが保育園や学校に行っている時間に集まって話し合いをし、そんなに長い時間にならないようにするといった取り組みは一つの事例かと思う。

イベントの開催も、土日だと子育て世代の方は参加できないので、平日のイベントも今後考えていく必要があると思っている。広くいろいろなことを周知していくためには、ターゲットを性別や年齢層など、しっかりと決めて、そこにアプローチしていくのはすごく重要なことと思って活動している。

**【回答：千葉さん】**

私の職場では、私が初めて子供を持った女性職員だったので、積極的に娘を職場に連れていった。積極的に連れていくことで、子供が保育園に行けないときには、職員みんなで面倒を見たり、子供がそこに居てもいいという環境が保たれているのはありがたい。お互いのことをわかり合えるありがたい職場だと思っている。

地域貢献の盛んな家庭で、義理の父が区長、夫が鬼剣舞と消防団などをやっているため、家にほとんどいない。私もPTAなどをしているため、みんなが集まれる日を決めて、そこで何かを育ててい

こうと家族で決めている。

**【回答：熊谷さん】**

盛岡支社の中に昨年事業所内保育所を作った。小規模ではあるが、働くお父さんお母さんの支援をしている。

時間休が取れない制度になっているため、会社と交渉している。

**【回答：松田さん】**

遠野市のわらすっこ支援委員会をやっている。小さいお子さんを育てているお母さんの中には、ママ力というのか、いい意見を持っている方が割と多い。しかしながら、そういうお母さんたちは会議に呼ばれず、残念である。昼間は仕事をしているし、夕方の時間はご飯を作っているのどの時間も駄目となってしまうが、託児をするなどして会議に来ていただいて、自分の意見がその中で輝くような体験をすると、いろいろと周りが変わるのではないかと思う。今は、SNSなどのツールがあるので、忙しいお母さんたちと連絡をする際は、LINEでほぼ決まる。顔を合わせた時は、少ししゃべって決めるというようなことがあるので、そういったツールも利用していけばいいと思う。

**【回答：菅原さん】**

子供が保育園、小学校、中学校に入るが、PTAなどで親の出番が多い。仕事に1日中いけると思いきや午前中で帰らないといけない。働き方改革で先生方の働き方も変わって、部活動で呼ばれて、親が中途半端な時間に行かなければならないことも出てきてしまう。そういう出番が本当にこまごま多く、配慮してもらわなければいけない状況がある。今の会社では、介護をされている方もこの時間に帰る、外出するというので、御理解いただいている。そこは専門分野をつくらないでみんなで回せるように、仕事がわかりやすくなる仕組み作りで、そういうことができると感じている。

**【回答：桶田さん】**

加工事業をしており、地元の女性の方に来てもらいたい、午前8時から午後5時までの勤務時間となると、行けないという方が多い。どのような勤務体制であれば可能か聞くと、午前中だけ、午後だけ、午前9時から午後4時までなら大丈夫ということで、勤務時間を自由に選んでもらえるようにした。意外と農村地域には、家にいるお母さん方がいる。働きに出たくても、時間に融通が利く会社が無いので働きに出られないという方がいるので、そういった方にも出てきてもらえるような体制づくりを実施した。

そういう女性が働きだせる職場づくりが、結局は経営の改善につながると思うので、中小企業の経営者の意識の改革が必要ではないかと思う。

**【回答：高橋さん】**

弊社の場合は、子供を持っている女性にいろいろ手厚い制度が整っている。トヨタ自動車東日本の傍に託児所もでき、社内制度も充実している。可能であれば利用したいと思える制度が結構ある。

同じ部署に最近妊娠した女性がいて、つわりがひどい状況が続いていた。旦那さんも同じ会社であるため、症状によっては落ち着くまで休んではどうかと職場の上司を通じて話し、療養にいった。そういったことも、いろいろ協力的な職場である。

私は、2人目の子供を産んだ時に、子供が血液の病気になり、どうなるかわからないという状況で、産休だけでは足りず、会社を辞めるしかないと思っていたが、その時に育休制度ができた。こういった制度があるのはすごくありがたいと、本当に心から感じ、制度を充実させていただければと思う。

**【回答：小野寺さん】**

先ほど交代勤務をしている方のお話をしたが、家族の御理解が第一に必要となる。家庭の事情などいろいろあるので、それぞれ個人で事情を聞いて、出来る出来ないのジャッジをして、それでも大丈夫という方にだけ交代勤務をお願いしている。

その他に、例えば病気などで、仕事を続けるのは無理だという話が出てきた場合には、やめるのではなくて、病欠で休暇を取ってもらうという方向で、できるだけ仕事を続けてもらうように考えている。

女性の社員の場合、なかなか男性の上司に言いにくいようなことも正直あるので、上司も女性であれば、言いやすいこともあるので、そういうことは汲んで、勤務にも反映することをやっている。

息子の家族と同居しているのだが、80歳を過ぎた祖父母がひ孫といる時間ができた。そうすると、脳も活性化する。明るく笑顔も増えた。私の住んでいる地域では、老人会と子供会で一緒にやる行事を増やしている。お孫さんがいないお宅でも子供会の子供たちと触れることで、楽しみが増えるという交流も必要だと思う。

## ◆ 議員の感想

### ○小西和子議員

教育の充実というお話があった。男女混合名簿という性別で分けられない名簿の実施率が県内の学校では低い。そこで、さまざまな要望があって、2022年までに小・中・高校、特別支援も含め、100%にするということを県の教育委員会は打ち出した。

男が先で、女が後という考えが小・中・高校で刷り込まれて、そういう人を作ってきた。

本日、たくさんの課題を伺ったので、県政に生かしていきたい。

### ○武田哲議員

私は稲作農家だが、子供を背負って田植え機に乗っていたら、近くの人に、まだ若いから、いい人がくると言われたことがある。要は、子供を負ぶって田植えしていたので、奥さんに出ていかれたと思われた。しかしながら、それは子育ての間の楽しい時間、子供といかに密接に関わるかということだと思う。

子育てを家族とどうやって一緒に喜びを分かち合って、自分の子供がしっかりまた地域に戻ってこられるという考えでさまざま活動してきたが、皆様の意見を聞いて、これから県議会で解決しなければならないこと、そして、女性というわけじゃなくて、男性も女性も地域をどうやって盛り上げようかということに、積極的に関わっていることに感銘した。

### ○高橋稔至議員

初めに人口減少の話があったが、適齢期の女性が外に出てしまうと帰ってこないという中で、女性が働きやすい環境の職場などの条件が必要だという話があった。県南地域では、ものづくり企業がたくさん来るが、男性型の企業が多く、女性が行きたい企業が実は少ないのではないかということ課題として思っていた。また機会があればお聞きしたい。

魅力ある地域とはどのような地域なのか、自分の住むところで仕事をし、暮らし続けられる地域になるよう、皆さんの意見を聞きたい。

### ○臼澤勉議員

やはり男性側の意識、あるいは家庭内や職場内での男性への注文をもう少しいろいろ聞いたかった。

夫婦はお互いに鏡みたいなものなので、夫が笑顔なら奥さんも笑顔になるし、奥さんがニコッとしていれば、旦那もニコツとなる。それは職場でもそうだと思う。今後もそういうふうになれるような働く場や育児の環境を作っていく。

### ○岩城元議員

皆様の活動と思いと課題をいただいた。今後も女性に対する、理解、尊重と思いをやりを持ち頑張りたい。

### ○佐々木朋和議員

行政、企業、学校やPTAなど工夫するところがある。今後も、継続的に御意見をいただきたいと思う。

### ○佐々木努議員

私から見れば、皆様は第一線で活躍している女性と思う。一方で、光が当たらない家庭で子育てをしている方や働きたくてもなかなか働けない方などが、たくさんいらっしゃる。いまだ、男女平

等ではないと私は思っているので、厳しい状況に置かれているシングルマザーの方々も含め、そういう方々にどう光を当てるか、支援していくかということが大事だと思っている。そのためにも、皆様方には、これまで以上に様々な意見を発信していただいで支えていただきたいと思う。我々も、すべての女性が頑張れるよう仕事をしていく。

#### ○工藤勝子議員

皆さんの話を聞いて、それぞれいろいろな分野で仕事をされているが、自分の仕事にしっかりと自信と誇りを持って取り組んでいると思った。皆さんと一緒に仕事をされている方々や地域活動をやっている人たちは、皆さんの背中を見ているのではないかと、私は思う。これからもぜひ自分の持っているいろんな知識や経験を生かしながら、それぞれの分野で活躍をしていただきたい。

女性の視点の視点を生かす、女性活躍を応援するという時代が変わってきている。そういう波に乗ること。女性が出ると叩かれる地域もある。しかし、出せば叩かれない。逆に応援してくれる人たちがいるので、これからも皆さんの活用に御期待申し上げる。

#### ◆ 閉会

#### ○佐藤ケイ子座長

皆さんの活動を聞きながら、本当に頑張っているということを実感した。仕事、子育て、介護、地域の活動も皆さんそれぞれの役割をしっかりとこなされ、そして、その地域や職場の情報交換など思いやりを持って暮らしている、活動していることを実感した。

皆さんの活動は成功事例だと思う。皆さんの活動は、もっと県民の皆さんにもお知らせすべきではないかと思う。

様々な理由で、社会の活動ができていない方々に対してどうやって光を当てるのかということも私たちの課題である。保育や教育の支援、交通問題もある。もっとそういった実感を持って、これからも取り組みを進めていきたい。

本日頂戴いたしました御意見、御提言につきましては、県議会全員が情報共有し、今後の議会の活動に生かしていきたい。これからも、県議会に対しての御意見、御提言をお寄せいただければと思う。

御提言いただいたことに感謝を申し上げ、閉会とさせていただきます。